
黒の御子

コトノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の御子

【Zコード】

Z3818Y

【作者名】

コトノハ

【あらすじ】

世界に災厄をもたらすとされる、黒の御子。世界から生を否定される赤子と、我が子を生かそうとした両親の顛末。

* 以前部誌に投稿した作品です。

(前書き)

以前部誌に投稿した作品です。

「馬鹿な」

彼の唇から零れ落ちたのは、酷く擦れた咳き。それは、赤子の声に搔き消され、彼自身にも届くことはなかった。腕の中にある命。待ち望んでいた存在。そして、それは彼の世界を木つ端微塵に碎く者だった。

「黒の、御子 災厄の、者」

茫然と、彼はその名を口にした。

嘗て、世界を滅ぼしかけた、闇の龍愛を受けし人間の呼称。その証は、赤子の髪と、瞳の色に表れていた。鴉の羽根より、黒曜石より、深い深い黒。漆黒と呼ぶべきその色は、闇の精靈王の加護を受けた者以外に、宿ることはなかつた。

「ラルス……」

妻の声に、はつとなる。彼の田の前で、彼の最愛の女は、自らが産み落とした命に、そつと手を触れた。

「……可愛いね」

その言葉と共に、彼女の頬に零が滑る。愛おしげに、赤子を撫でながら。

「こんなに、可愛いのに、どうしてつ

続く言葉は、声にならない。」

「シリエ」

彼は、嗚咽を堪える妻を抱きしめた。

「大丈夫だ。お前も、この子も、俺が守るから」

腕の中の温もりに、誓う。

「泣かなくていい」

全てを捨てる覚悟は、彼女の手をとるときこそ、できている。

「例え、世界の全てが敵だとしても、守るから」

愛する者達が守れるなら、世界が滅びたって、構わない。

「 その人達は、どうなつたの？」

そう、少女は少年に問い合わせた。大抵の日本人と同じ少女の黒髪は、酷く短く切られており、何処か痛々しい印象を与えていた。

「逃げたよ。世界の全てが敵だつたんだから。逃げて逃げて、逃げ続けて。 でも、結局は、逃げられなかつた」

少年は、少女に向けていた視線を、赤みを帯びた空に上げた。その髪と同色の瞳は、深淵を想わせる漆黒。

「追手に追い付かれて、父親が死んだ。それで、後に残つた母親と子供も殺されそうになつたけど、母親は、子供だけでも逃がそうとしたんだ」

次第に濃さを増す赤に、少年の黒はよく映えていた。

「母親は魔女で、魔法が使えた。だから、魔法で子供を遠くへ逃がそうとした。そして、魔法は成功したし、失敗した。子供は、その世界から消えたから。世界の全てが子供を探したけど、それっきり、子供は何処にもいなくなつた」

「……それで終わり？」

「これで終わり」

少年の返答に、少女は不満を漏らした。

「つまんない。めでたしめでたしはないの？」

「世界にとつては、めでたしめでたし。だつて、世界を滅ぼせる人間がその世界からいなくなつたんだから」

「……お父さんと、お母さんと、その子は、幸せになつてないよ」「そうだね。でも、初めから、そういう話だつたから、それだけのことだつたんだよ」

少年は、少女に視線を戻した。

「もし、その親子に幸せな時があつたのなら、それは、逃げている

「どうして？」

「どうして？」

「少なくとも、希望はあった。逃げ続けて、殺されない限り」

ベンチに腰掛けっていた少女は、膝を抱えた。

「希望は幸せじゃないよ」

「でも、無いよりはあつた方がましだろ」

少年の声は、何処までも淡々としていた。

「さて、帰ろう」

少女と共にベンチに座っていた少年は、傍らの木刀を手しにして立ち上がった。

「帰りたくない」

少年が差し出した手を取りながら、しかし、少女はその場を動こうとしない。

「夜の公園は危ない」

「夜空と一緒なら、大丈夫だよ」

己が夜空と呼んだ少年が、大人一、三人程度なら容易く木刀で叩きのめせることを、少女は知っている。

「でも、帰ろう」

「帰る場所ないもん」

少女は泣きそうな顔で言つ。少女の父親は仕事が大事だし、少女の母親は弟が大事だ。少女の家に帰つたとして、そこに少女の居場所はない。

「なければ、作ればいい」

少年は微笑して、少女の頭を撫でた。

「大丈夫。ヒカリが望んで、頑張れば、絶対作れる」

少女は、少年の顔を見て、微かに頷く。

そして少年は、少女の手を引いて歩きだした。

「夜空」

「ん？」

「また、お話をさせてね」

「分かつた」

頷いた少年の横顔を、少女はじつと見つめる。少女の家の近所に住む、不思議な少年。大人びた、というにはあまりにも老成し、達觀した物腰。木刀をよく振りまわしていて、けれど、その太筋は我流というには綺麗すぎ、スポーツというには実践的すぎる。彼だけが紡ぐ物語は、ちつとも優しくなく、何処か恐ろしくすらあつた。それでも、繋がれた手は、温かい。

望んで、頑張れば、帰る場所を作れるというのなら、この少年の隣は、自分の帰る場所になるのだろうか。少年に手を引かれながら、少女はふと、そんなことを想つた。

(後書き)

ネタバレすると、黒の御子＝夜空君。
異世界トリップ物を書きたくて書いたものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3818y/>

黒の御子

2011年11月9日22時04分発行